

ら、靜かにして居給へ、出たら何んなにでも出来るから」芝が言つた。

其の晩隣りの留置場では、刑事が這入つて居て、刑事同志でおかしな問答をした。

「松山のかん獄へ行くんで御座んすか」

「まだ出て見な解らん、今度悪い事をしたら叩き殺されるぞ」とか云ふ風にだつた。

大正十三年一月廿一日の朝になつた。

小使が格子の外を奇麗に掃いて、小さなポンプで、板壁や其處に積み重ねてある布團に霧を吹かせてゐた。

消毒薬の匂ひが鼻を撲つ。

僕は傳染病患者なのだらうかと思つた。

義母は着替の着物を持つて來た。

晝過ぎて、父と芝や巡查達がぞろりと這入つて來た。

めんど臭い事をまだ不安氣に言ふので、僕はオコツた。

ガチャリと錠前を外して、格子の扉を開く。